



特42

879





東の都も遠
常陸の國を

大関和七郎

阿国

阿国

候一々水戸赤中納言
 齋昭公ハ時の御
 將軍ハ一々天保甲
 辰のころより夷船
 の波着まはるる
 是を正襟夷を喰ひ
 て煮くその策と
 秋まると強とも暮有
 の者自若偷安とて
 良さく採用あらは
 ちりもあつたるゆゑ
 文久戊午の年の事を
 半らしてあつた秋の頃



赤中納言

松山弥三郎

同宗師より
 前中納言殿
 一内前より
 物ふよ一語
 その旨を
 主として撰夫
 公認ひあつ
 三十一の
 大老江州

ついでに老根の腹を
掃蕩し伊

弱と
拒れ
奉
還



津田市五郎

口東京へ一筆

あんなやこれぞ
新田小傳
まじりや
とこれら
微書
と書

三ノ

綱光對する
あは後任正と以て

水戸家へつうかへ
綱首とさし
勅命と

返上
返上
返上

まんの士民若これと
これめなりは
我の君と欺む

やまんのため
これぞ

下したる
朝首
勅書



つぎ 争もつれと戦うるまじきもの
 始めも大平小瀬原なる沖代されと
 幕政さつんふおこるまじきとあつて
 むいけり安堵考り同志の考を
 せらひて既小長岡原を
 屯集するこゝめてるを
 せららんとあまよき
 西より移さ固籠あつて
 せららふ
 勝部四方
 の衆人皆大いふ
 動揺あまされぬおこ
 もこのこと幕府へ聞入



それの情極を水戸家へ
 達しるふ景山公もあつて
 おどろきりひて論の
 あまをきき
 これら衆
 後ふ
 〇か
 ありて
 幕政さつん
 せらひて
 せららんとあまよき
 て衆人あつてあまよき



つきしあひ眠りの寝
 夢に邪政のゆく
 遊長を鳴呼惜む
 一驚をば一良由も
 多の幽囚せられ勢ふ山
 のちふおくはく陰れ
 人となかりあふぬれ
 年も改まるも茶也
 元庚申の年の事
 申す二月の末の八日
 常陸と河とみと
 東の都へおもむき



つらふこの事
 とやも水戸
 家より幕
 府へきこく
 せれうちんふと
 乞ひふふをくふ
 まくの徳侯ふ命せられ
 たんさくをまをれ
 作くあひ一義
 善命もりあふ
 花さうり行
 海の志のあ
 一々



有村源清

決後の備も

指さす
 酒のついで
 一歩男の
 倫状をきき
 せむらふん
 けいど賊
 うごき後一
 んやうも後益
 傾各事とま
 の言のまみ
 較測や浦
 と慷慨火



白
 と格
 くらひ赤
 きらのあ
 合和と
 くのはま
 あて今や
 あとを
 待つま
 らうま
 きの
 赤もつ
 後松の

ちねその月
 ちねその月
 夜ゆあ
 重みれ
 義堂
 類堂
 武士
 とわ
 参
 く
 ま
 供



せうく
 の時
 登
 ちね
 由

有村流虎三門兼清入志のひきかき
 如き種を突通一途一ひきかき
 手もやふるもやふる老のちよひひきかき
 きんまぐ白首おちさる一ひきかき
 袖を引ひきかきこれよひ首を
 ひきかき一ひきかき
 後其國女流をひきかき
 乗まふ敵をひきかき
 みて國流ひきかき一ひきかき
 ままひひきかき一ひきかき
 敵と血争ひ一ひきかき
 こひひきかき
 由は流ひきかき

箱田重藏



白柳小鮮血を
 きて花の
 鏡のまき
 みるごと
 お先を貴
 も多かれと
 中ふ大実和三郎
 昔五六夜流の
 ある流
 流郎入自解
 中て流の華四五流
 狼狼の流入自解
 兼清の流をひきかき



+



明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年一月廿二日御届

明治十二年

明治十二年一月廿二日御届

價三匁五厘

編輯者 東京日本橋區松島町一番地
 出版人 大西庄之助

